

本論文は

世界経済評論 2017年9/10月号

(2017年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料
OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

去る5月20日、ニューオーリンズではロバート・E・リー將軍の銅像が除去された。リーは、ご存知、南北戦争の最終局面で南軍の総司令官になった人だ。その銅像をなぜ今頃除去することになったのか。南北戦争といえは1世紀半前の事件である。2年前は150周年記念として、ニューヨーク・タイムズ紙などは、この戦争の新解釈を出す連載を企画したほどだ。

連載の記事の一つに北部のベンジャミン・バトラー少將の措置があった。緒戦で北部の砦に現れ働きたいと申し出た黒人奴隷を、時の連邦法に従い逃亡奴隷として南部の奴隷所有者に戻すべきかどうか直視して、少將はこれを勝利品として戻さないことにした。これがリンカーン大統領の奴隷廃止宣言の法的糸口となったという。

メルヴィルの詩「議会のリー」

この戦争を日本で「南北戦争」と呼ぶのはアメリカでの名称の一つに因るようだが、本家では当初から一般に「内乱 (Civil War)」と呼び習わしている。しかし、奴隷制度を維持するため「連合州 (United States)」から「離脱」「分離」を宣言して戦争を仕掛けた南部諸州は、この戦争を戦争中から「分離戦争」「南部独立戦争」などと呼び、多大の犠牲者と戦災を出して降伏した後は、却って、この戦争が「宗主権」を求めるものであった、従って、敗戦は「失われた大義 (the Lost Cause)」であったという見方を前面に押し出したのだ。

この戦争が同国人の、大半白人同士の戦いであったことも事情を複雑にした。

たとえば仮に南部の叛乱が黒人奴隷によるものであったとしたらどうだろう。リンカーン大統領の第2次政権就任演説は、「誰にも悪意を持たず、全てに慈悲心をもって」という寛大さで、敗北側への復讐措置を牽制したことで有名だが、も

し叛乱者(とリンカーンは戦争を仕掛けた南部人を呼んだ)が黒人だったら、そのような言葉を用いたかどうか。もし偉大なリンカーンにはこの仮定が適切でないとするなら、ここに『白鯨』で有名なハーマン・メルヴィルの詩「議会のリー」がある。

リー將軍は、終戦の翌春、議会の再建委員会に召喚された。メルヴィルがこの詩に添えた解説によると、リーの出頭は他の南部人を抜いて関心を集めたが、証言では委員の質問に簡単に答え、その後、なんでも言いたいことがあればという誘いを断り、自分の発言のうち二、三補足をして、委員会は解散した。だから、200行を超える詩の半分を占めるリーの言葉はメルヴィルの創作だが、その中で(ほくの解釈敷衍ながら)「南部は奴隷制度を悔悛するかと問われれば、我らは戦争に負けたというのみ」と言わせている。そして、リーを冷厳さを失わない堂々たる敗將として描く。

メルヴィルが「叛乱の軍人の長」リーに仮託した言葉は大方現実になった。

奴隷制度の回復

奴隷制度廃止は南部降伏の前に憲法修正第13条として議会で成立し、終戦した1865年の末に批准された。しかし、南部州は降伏後も戦争が黒人奴隷制度の維持のための戦争だった事実を忘れなかった。それを示すのが、黒人を従属状態に戻す制度の導入である。中でも、公共の場で白人と黒人を隔離する措置は、1896年、最高裁が Plessy v. Ferguson 判決で「隔離しても平等 (separate but equal)」と合憲として悪名を得た。この訴訟は、ニューオーリンズで、プレシーが汽車で白人の座席に座ろうとして逮捕されたことに始まる。ルイジアナ州は、1890年、「隔離旅客車法」を成立させていたが、プレシーは黒人の血を

8分の1ひく octroon だった。

一方、勝者たる政府は南部州がこのように奴隷制度に近い諸制度を蒸し返すのを黙諾していった。週刊誌「The New Yorker」の寄稿者アダム・ゴブニックは、最近、アメリカ独立戦争の伝統的解釈を覆す新刊“Revolution Against Empire”と、独立戦争を美化する見方と逆に、それが極めて残虐なものだとする新刊“Scars of Independence”についての論評で、この黙諾を「恥すべきこと」と断じている。

こうした中で、南部州では、南北戦争が互角の力量と技量を持つ軍隊の衝突であり戦いであったという見方が根付き、著名な南軍将軍を顕彰する銅像を建て始め、結局多数の銅像を建てた。また、南部連合軍の旗などを誇らかに顕示するようになった。

人種差別表明の「自由」

リー将軍の銅像の5月の除去はニューオーリンズでは4番目で、それで同市の予定されていた除去を終えた。市議会がこれらの除去を決定したのは2015年12月18日で、決定の直接原因は、同年6月17日、ディラン・ルーフという21歳の白人男性がサウスカロライナ州チャールストンの由緒ある黒人教会に入り、黒人信徒9人を拳銃で射殺した事件である。ルーフは自分のウェブサイトに、白人至上主義、ネオナチズムの表徴とともに、黒人嫌悪宣言を掲示していた。

銅像の除去は全て今年の春になってからで、4月24日は「自由の場の戦い」を記念するオベリスク（方尖塔）、5月11日は南部連合大統領ジェファーソン・デイヴィス記念団が1911年建てた銅像、5月17日は1915年に建てられたP. G. T. ボーレガード将軍の騎乗銅像が除かれた。

中でも「自由の場の戦い」方尖塔は記念碑として露骨だったと言える。これは、1874年9月、

当時ルイジアナの州都だったニューオーリンズで白人至上主義者が反乱し、南北戦争の南軍残兵約5,000人が市警及び州民兵併せた約3,500人の警備隊を攻撃してこれを打倒したことを記念するものだったからだ。3日後、グラント大統領（南北戦争の北軍総司令官）が派遣した連邦軍隊が到着した頃迄には反乱勢力は散り散りになって一人も逮捕されなかった。

しかし間もなく「大義派」ともいべき勢力がルイジアナ政界を制覇、1891年、この事件を記念するため方尖塔を建てた。20世紀の後半公民権運動が高まると、この記念碑はあまりにも黒人をないがしろにするものとして、1989年、別の所に移されていた。それに先立つ1983年、市議会はこれを全く除去する決定をしたが、説明書の内容を書き変えただけに終わっていた。

除去反対の実態

当然、これら銅像や表彰の除去には強い反対があり、2015年末の市議会の除去決定では、ボビー・ジンダル知事も反対を表明していた。ジンダル知事はインド移民の息子であり、白人至上主義者でもあるまいが、保守的共和党員として若い時から名前を上げている人である。

確かに、そのような反対派は、表に出さずとも白人至上主義者が多い。バージニア大学のあるシャーロットツヴィルでは、今年4月市議会がリー将軍騎乗銅像の除去を決定したが、5月半ばこれに反対する人たちの集会では、白人至上主義者の発言が飛び交い、スローガンが掲げられた。中にはナチの標語「血と土」もあった。ヒットラーの『わが闘争』の人種差別観はアメリカの黒人差別に基づくものであったともいう。

さとう・ひろあき ジャパン・タイムス コラムニスト。